

2026年 日本の国産LLM採用最前線：海外勢との「棲み分け」で挑む独自の勝ち筋

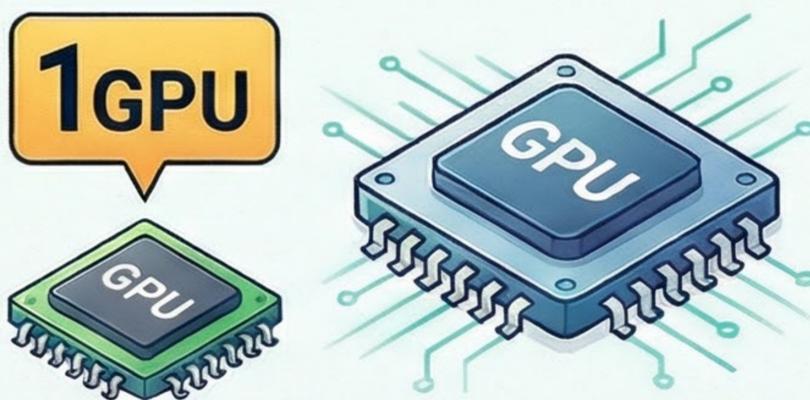
国産LLMが選ばれる3つの「独自の競争軸」

データ主権と高度なセキュリティ



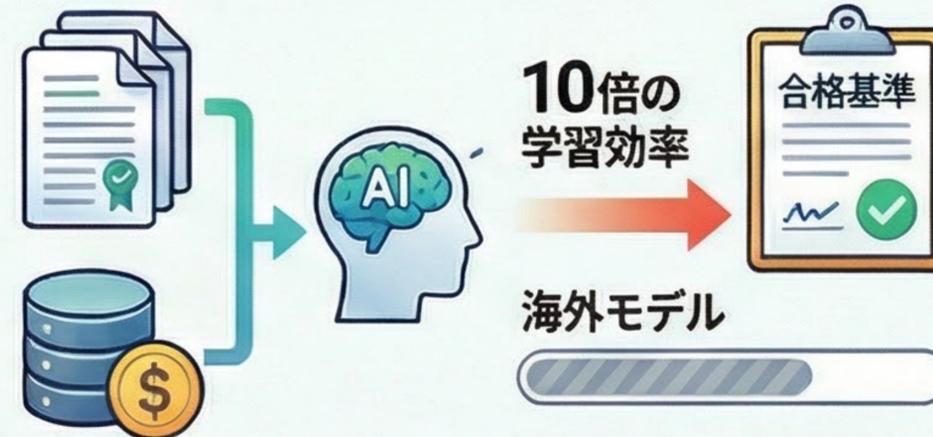
機密データが国外に流出しないオンプレミスや閉域環境での運用が選定の決め手となっている。

1GPUで動作する圧倒的なコスト効率



NTTのtsuzumi 2などは1基のGPUで推論可能で、API課金に比べ長期的なコスト優位性がある。

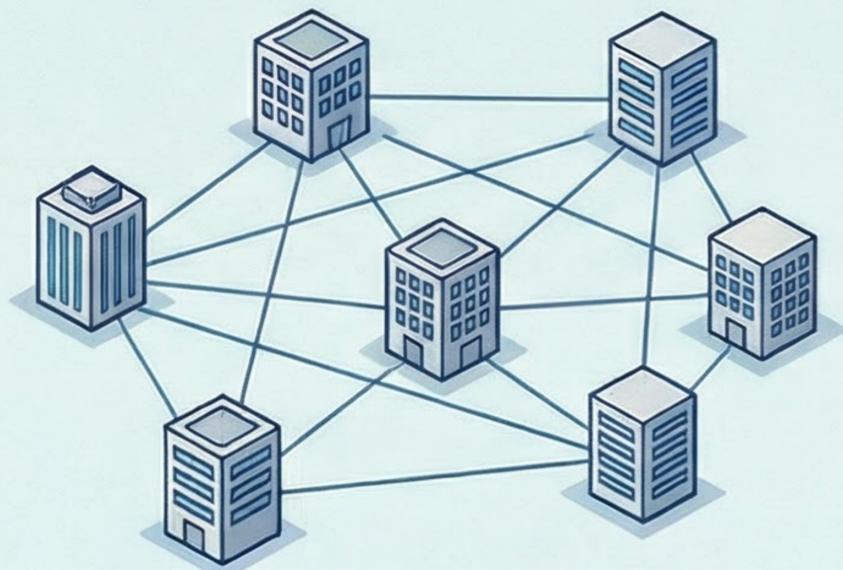
業界特化型の高い学習効率



金融分野の追加学習において、海外モデルの10倍の学習効率で合格基準に到達した実績がある。

社会実装の加速と政府による強力なバックアップ

行政・公共分野への大規模導入



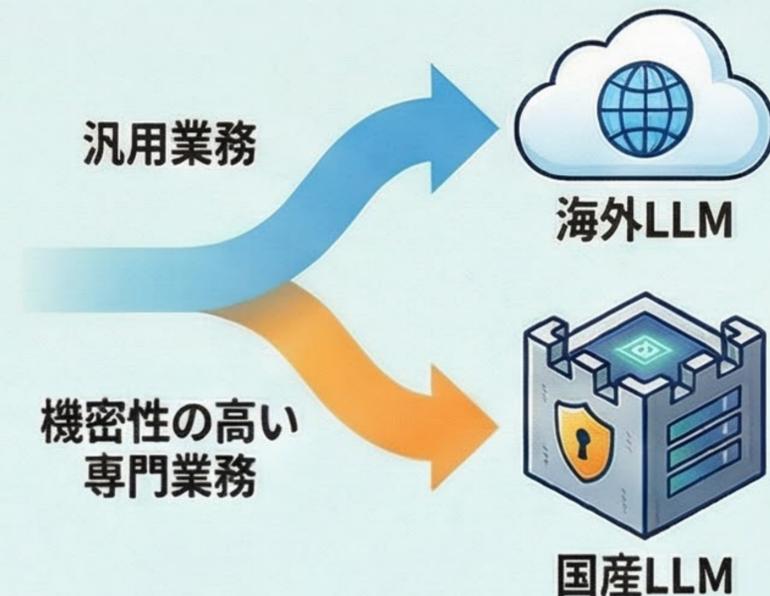
デジタル庁の「ガバメントAI」公募や、150以上の自治体でのPLaMo導入が進んでいる。

5年間で1兆円規模の公的支援



経済産業省によるGENIACプロジェクト等を通じて、計算基盤や開発力強化を国策として推進。

海外モデルとの「ハイブリッド棲み分け」



汎用業務は海外LLM、機密性の高い専門業務は国産LLMを使い分ける戦略が定着している。

主要な国産LLMの立ち位置(軽量高性能 vs 大規模化)

モデル名 (企業名)	tsuzumi 2 (NTT)	PLaMo 2.2 (PFN)	Rakuten AI 3.0 (楽天)
パラメータ数	300億	8B/31B	7,000億
主な特徴・強み	1GPUで動作する軽量設計、金融・電力等への特化に強み	日本語指示追従でGPT-5.1に回融、150以上の自治体で採用	国内最大級のパラメータ数、2026年等にオープンモデル公開予定